

煙たい男たち

志茂田景樹

Text by Ken Nakamura / Photographs by Shigeo Kato / Agency

一貫して僕は僕なんで、
それを普通じゃないと言うのが
偏見なんですよ

独特のファッションで現れた志茂田景樹は、麻布十番にある事務所から飯倉の交差点近くの撮影場所まで歩いてきたらしい。むしろそれぐらいの距離を歩くのは朝飯前で、時間がある時は事務所から自宅のある武蔵境まで約20キロを歩くこともあるのだという。

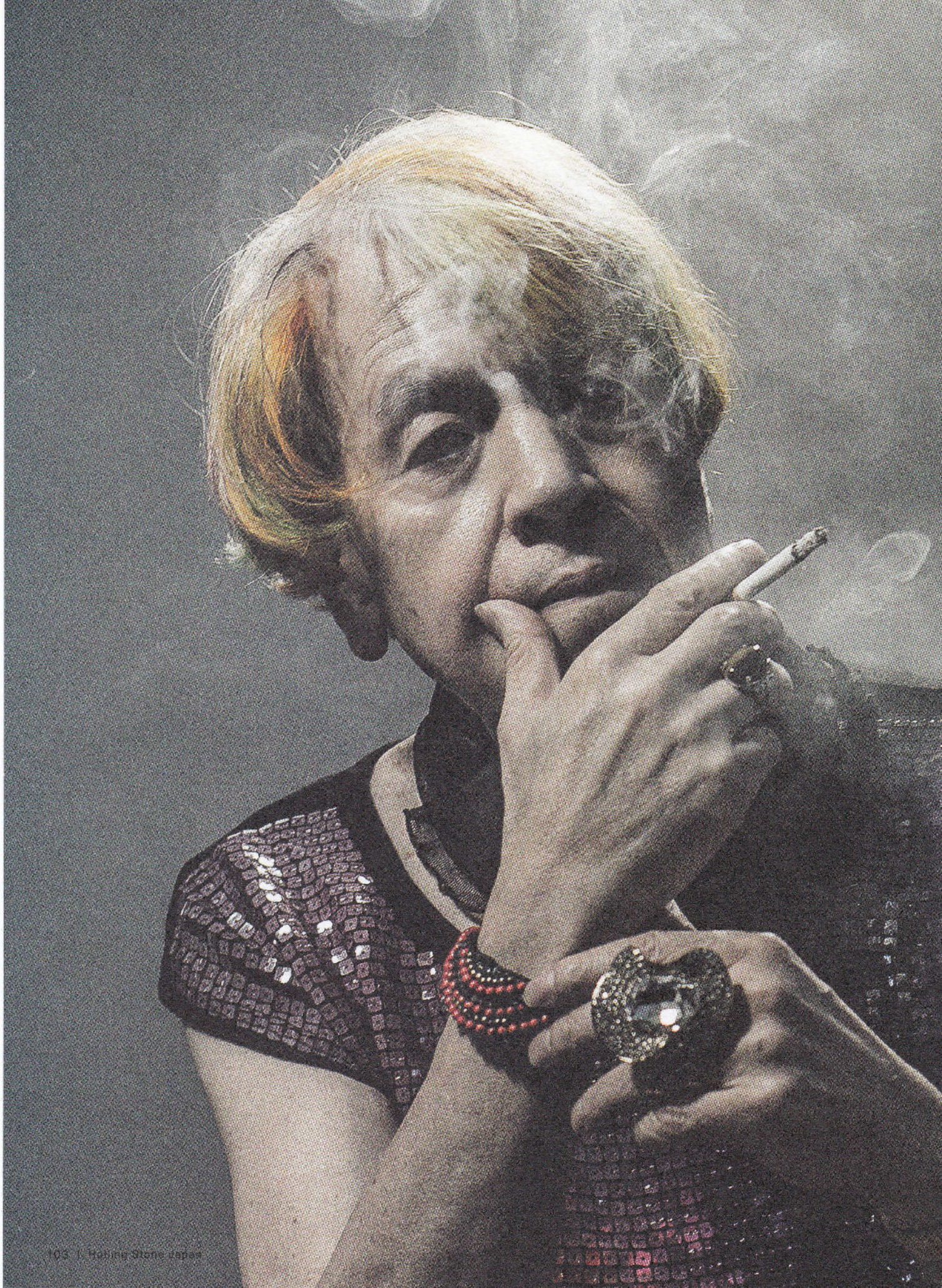
現在76歳だが、健康だし、煙草も酒もやめていない。

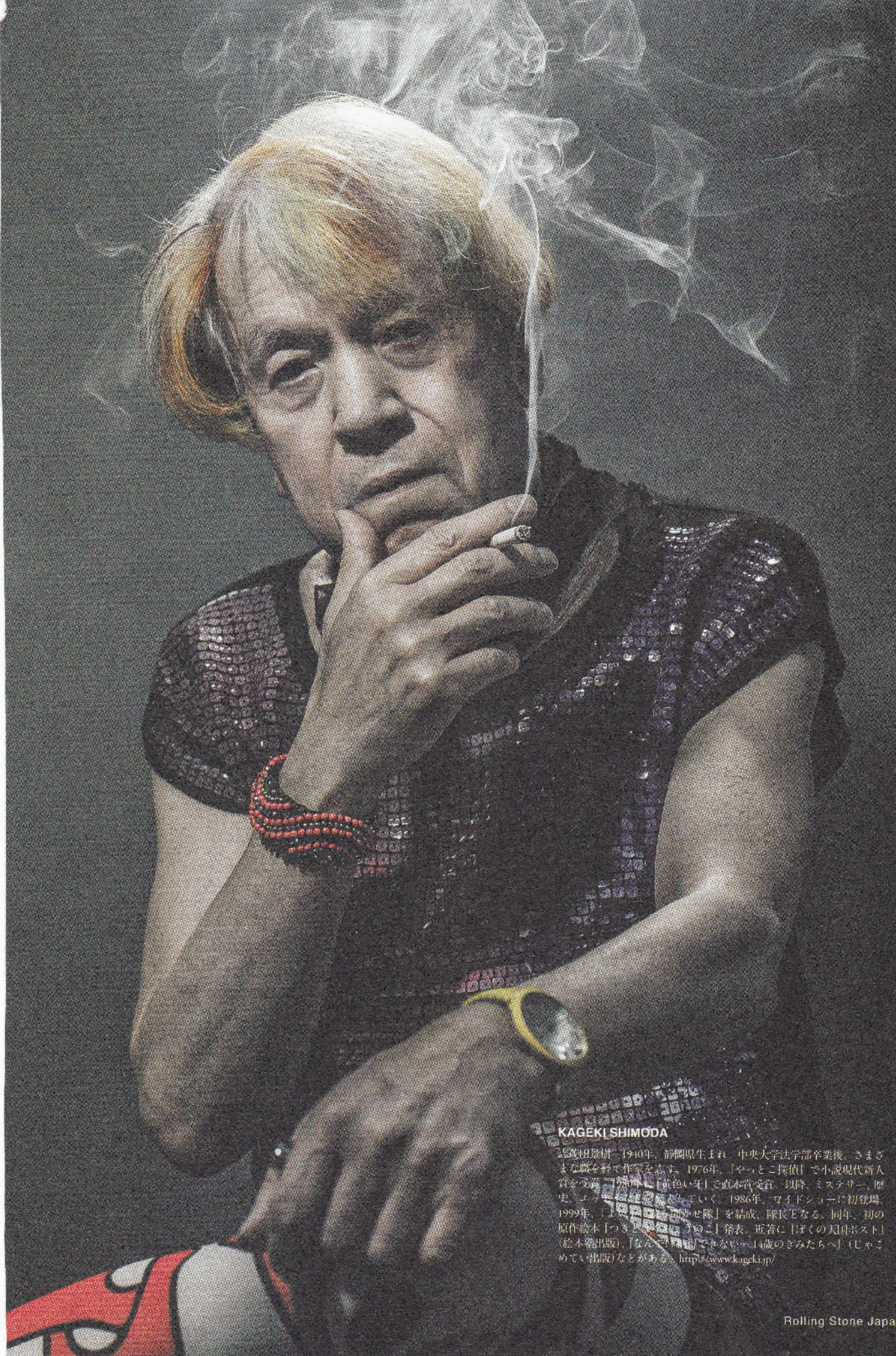
撮影が始まると美味しそうに煙草を吸う。聞けば、高2の頃から吸っているらしい。「煙草を吸ってから背が伸びだして、大学3年生まで伸び続けて179cmになったんです。大学の時、井の頭公園で中学3の時にクラスで一番背が高かった171cmのヤツに声をかけられたんですけど、自分より低いところにいるから誰だかわからなかったことがありましたね」と、ユーモラスなエピソードを教えてくれた。煙草を始めた当時、志茂田が通っていた都立直立高校は旧制中学の名門で、厳しい学校だった。それでも人気のない体育館や近所の桑畑で一服していた。仲間の何人かは学校に見つかり、停学を喰らったそうだが、なぜか志茂田は平気だったという。その理由を尋ねると「うちが父親が厳しくて、僕のお姉ちゃんをしょっちゅう叱ってて、お姉ちゃんは立川の市役所に勤めていたんですが、モダンな人でね、赤いハイヒールを履いてたんだけど、親父はそれが許せなかったみたいで、ハイヒールを投げ捨てていましたから、そんな様子を見ていたから、どうやったら怒られないのか、要領を得ていたのかもしれないね」と、煙草を煙しながら大爆笑い笑い顔で答えてくれた。

そんな話を聞いて疑問に思うのが、志茂田の服装。赤いハイヒールがダメで、タイツ・ファッションを厳格な父親が許すはずがない。だが「それに関しては全然大丈夫でしたわ」と飄々と教えてくれた。

志茂田の不思議なファッションを筆者が最初に見たのは、90年代初頭に彼が『笑っていいとも!』にレギュラー出演していた時だった。紹介時、肩書きには〈直木賞作家〉とあった。当時、筆者は大学生だったが、ブラウン管の中のタイツ姿で不思議なヘアのキテレツなおじさんが直木賞作家なはずがないと思った。目の前にいる志茂田に告げると、あっさりとう言われた。「一貫して僕は僕なんで、それを普通じゃないと言うのが偏見なんですよ。僕を変だって言う人のほうが変なんです」と。穏やかな口調のまま、彼は続けた。「だってずっとこの格好を貫いてきて、今は普通に皆こういう格好をしてるでしょ? この間も若いヤツが“志茂田さんは今の若い人のファッションをマネしてるんですよね?” って言ってきたんだけど、“僕はずっと前からこれですよ”と言ってやりました」と笑っている。

確かに今にして思えば、志茂田独特のタイツ・スタイルは何ら珍しいものではない。とはいえ、やはり80年代にはかなり風





KAGEKISHIMODA

1940年、静岡県生まれ。中央大学法学部卒業後、さまざまな職を経て作家を目指す。1976年、「ヤンとこ探偵」で小説現代新人賞を受賞。同年、「黄色い牙」で直木賞受賞。以降、ミステリー、歴史、エンタメなど幅広く執筆していく。1986年、「ワイドショー」に初登場。1999年、「上野動物園の怪獣」を結成、隊長となる。同年、初の原作絵本「つぎは誰か」を出版。近著に「ぼくの天」(ポスト) (絵本堂出版)、「なんでも」(ポスト)、「4歳のきみたちへ」(じゃこめてい出版)などがある。<http://www.kageki.jp/>

中年以上の男性は、自分の価値観からはみ出したものを 理解しようとする頭がなくてダメですね

変りだった。一体、どんなふうにあのスタイルは始まったのか。

大学時代はファッション誌を受読して流行を追っていたが、人マネが嫌で、自分らしい格好を模索し始めた。身長179cm、細身で手足の長い志茂田はガールフレンドが付いているブレスレットを「似合うから」と勧められて付けるようになった。直接のきっかけは、80年代後半、ニューヨークにデザインの修行に行っていた友人がお土産にセクシーな笑顔のマリリン・モンローが上から下までプリントされたタイツを2足買ってきてくれたことだった。最初は「これは男じゃ履けないな」と思っていたが、大学卒業後、幾つか仕事を転々とした後、作家としてキャリアをスタートしていた志茂田は、当時、執筆のため、白金の(シェラトン)都ホテルに在詰になっていた。その時、買ったまま放置していたマリリン・モンローのタイツにふと目が行った。そのタイツを履き、鏡の前に立ってみたら、「カッコいいじゃない!」と思った。時は5月。陽気もよく、志茂田はタイツ姿で外出をする。ところが……通りを歩きだすと、すれ違う人、すれ違う人、皆、ゲッ!と驚いた顔をする。特に中年男性は、なんだコイツ? って顔をする。今も昔も中年以上の男性は、自分の価値観からはみ出したものを理解しようとする頭がなくてダメですね。子どもと女性のほうが柔軟!と当時を振り返り語った。さらに歩いていると……3人組の男性とすれ違う。40代半ばで3人とも同じ会社のバッヂを付けていた。「仮名で言うと、X物産のバッヂでしたわ。40代という課長くらいでしょ。なので見た目は紳士だし、僕を見てもなんだコイツ? っていう顔はしない。でも、すれ違った後、立ち止まって絶対にこっちを見てるぞ、と思いう〜6歩進んで振り返ったら、案の定、立ち止まって僕を指さしていましたね。文字通り“後ろ指”を指された。流石に恥ずかしくなってホテルに戻って着替えようと思ったんですけど、かなり歩いてきちゃったので進むも地獄、戻るも地獄で、こうなりや進んでやろうと思って目的地の銀座まで歩いて行きました」。銀座で仕事をする予定だったが、仕事はせず、夜まで待ち。夜の銀座に飲みに出た。だが夜の銀座でもそのファッションは大変な騒ぎになったという。

それだけではなく、当時は文壇やその他のパーティに呼ばれることが多く、そこにもタイツ・スタイルで出かけた。その時の様子こう語ってくれた。「やっぱり、どよめきですよな(笑)」

そんなパーティなどで一緒になっていた、週刊文春の記者が志茂田のファッションを面白がり、3カ月の密着取材を行い、6ページのグラビア特集で彼のファッションを紹介した。その記事に素早く反応したのがバラエティ番組のプロデューサーたちだった。テレビ番組への出演が始まり、90年、ついに「笑っていいとも!」のレギュラーに抜擢された。

テレビに出るようになると世間の偏見も減っていく。ある夜、銀座で酒の人ったサラリーマンたちとすれ違った。以前なら、“後ろ指”のパターンだ。だが、かなり前方か

ら、志茂田を指さしている。それは、有名人を発見した時の仕事で、すれ違う時には「握手をしてください」とせがまれた。ある時は、サラリーマンの男性から肩を組まれてこう言われた。「僕もそういう格好したいんですけど、仕事柄できなくて。応援してます! 頑張ってください!」と。

そこへ行くまでには、屈辱的な言葉を浴びせられたことも多々あった。行きつけの吉祥寺・ハモニカ横町の飲み屋では、酔った客から「死ぬ!」と言われ、酒をかけられたこともあった。一方で、ハンカチを貸してくれた人もいたという。「まあ、人間いろいろですから」。冷静に、もう一度こう繰り返した。「中年以上の男性はホント、ダメですね」と。

志茂田のファッションは、彼の生き方のひとつの現れだ。きっかけはNY土産だったが、その前からもっと自分を解放して生きていきたいと思っていた。「人間は、生まれた時は無垢で、段々学習して知恵を付けていく。世間を渡るために悪知恵も付けてくる。それで心に余計な札が貼りついてちやってる。例えば傲慢という札、虚栄という札……いっぱい張りつけて心が重くなってる。札を全部取るのは難しいけど、取れるものは全部取りたいと思っていたのが、その頃。それで解放されて、身に付けるものに表出したんでしょね」

そんな志茂田は今、SNSを通じて若い人たちの相談に乗っている。ツイッターのフォロワーは27万人。若い人たちに、ライブ活動で行っているラップを通して贈ったのが「太陽は近く爆発するぞ」という詩だ。詩には直接書いてはいないが、こんなメッセージを託している。〈皆、暗澹としているけれど、太陽があと50億年燃え続けるかどうかなんて全然わからない。だから好きなことをやっておけよ〉と。そして、変わらぬ穏やかな口調でこう続けた。「今の若い人って、気分よくやろうとして、自分を抑えてるでしょ。だから、皆すごくいい感じでやってるし、頭もいいけど、何か足りない気がしちゃうんですね」

志茂田は自らの気持ちを抑えることなく、偏見にもめげず、自らのファッション・スタイルを通してきた。そのスタイルの肝である、タイツは10数本を履きまわしている。そのほとんどが頂き物だそうだ。伝線したタイツは短くカットし、パンティとして履いているという。髪は40日くらいで染め直す。現在、76歳だが、新作にも意欲的で年内には長編を書きだす予定だ。

ちなみに、直木賞受賞作でもある志茂田の代表長編『黄色い牙』は国鉄職員だった厳格な父親へのオマージュだという。父親は現場主義で出世などを望む人間ではなく、生涯その姿勢を貫いた。同作の主人公、マタギのボスであり、昭和初期の近代化の波に抗い古きマタギ社会を守ろうとし、時として周囲から疎んじられもする佐藤維憲は、父親をイメージして書いたという。志茂田のブレなさ、父親譲りなのかもしれない。見た目は華やかで、物腰も口調も柔らかい志茂田の、インタビューに答えるその眼は凛としていて気高い。